

論文審査の結果の要旨

| | | | |
|---|---|-----|-------|
| 学位記番号 | ※第 甲 5 7 号 | 氏 名 | 富中 佑輔 |
| 論文題目 | 〈女子生徒〉・〈女子学生〉表象の変容 —佐伯千秋・倉橋由美子・柴田翔の作品を中心として— | | |
| 学位審査委員 | 主査：増井 典夫 文化創造研究科教授（国文学専修） 副査：竹内 瑞穂 文化創造研究科教授（国文学専修） 副査：小倉 齊 文学部名誉教授（日本近・現代文学分野） | | |
| 論文内容の要旨 | | | |
| <p>本論文は、1950年代から1960年代の小説に描かれた〈女子生徒〉・〈女子学生〉表象を分析することにより、そこに描き出される高度経済成長初期における日本社会の構図を明らかにしようとしたものである。〈ジュニア小説〉を扱う第一部と60年安保等を中心とする学生運動を描いた倉橋由美子と柴田翔による作品を扱う第二部という二部構成を取っている。</p> <p>第一部第一章では、〈ジュニア小説〉の代表的作家とみなされていた佐伯千秋（1925年～2008年）の〈ジュニア小説〉の特徴について、佐伯の随想「現代っ子の言葉」（『こどもの暮らし』第1号、1975年7月）を用いながら整理している。随想をはじめとした資料群からは、佐伯の創作意欲が読者である戦後育ちの「現代っ子」たちに対する、多分に教育的な使命感から発していることが読み取れる。また佐伯は、たびたび作品に付した「作者の言葉」の中で、一読者から寄せられた悩み相談のファンレターに対する〈返答〉・〈回答〉を込めたものとして自らの作品を位置づけた。ここには、作家と少女読者とが悩みの告白とその解決を通じて連帯していたという、〈ジュニア小説〉特有の消費行動に潜む意識が示唆されている。読者を母親のように守り育てようとする佐伯の作家的使命感には、確かに、少女読者を導こうという意識が潜んでいた。だが同時にそれは、〈ジュニア小説〉という文学ジャンルが、理想主義的なモラルに基づくメッセージを発信する必要があるために、社会が是とする行動の結果として少女の幸福を描かざるを得ない、という限界を示してもいた。</p> <p>第二章では、佐伯千秋世代の〈ジュニア小説〉に対する批判意識が読み取れる夢枕獏（1951～）の山岳SF小説「山を生んだ男」（『奇想天外』1978年11月号）と、佐伯千秋による山岳部での登山活動を描いた〈ジュニア小説〉である「山頂にバラあり」（『ジュニア文芸』1969年10月号）を比較検討している。「山頂にバラあり」の分析を通して、ファンレターに対する〈返答〉・〈回答〉としての〈ジュニア小説〉の方法を具体的に明らかにするとともに、同作とは対照的に孤独な登山を描く「山を生んだ男」の分析から、先行研究において〈ジュニア小説〉の後継ジャンルと見なされている1970年代以降の〈コバルト小説〉が、理想主義的な男女共学的な共同体を必</p> | | | |

要としていないことが明示された。

第三章では、1959年に第八回小学館児童文化賞を受賞した佐伯の初期代表作である「燃えよ黄の花」(『女学生の友』1958年9月号)を取り上げている。同作では、広島に投下された原子爆弾によって「黒こげ」となったヒロイン・三千代の死体が描写される。三千代は、実際に被爆して亡くなった佐伯の従妹をモデルとして執筆されており、「燃えよ黄の花」はヒロインと想い合う男子生徒に佐伯自身が仮託された作品として読むことができる。同作は「黒こげ」となった〈女子生徒〉を描くことで読者であった女子生徒に強い印象を与えたと思われるが、〈女子生徒〉の死を消費するメロドラマから抜け出すことに成功したとは言えない。佐伯が〈女子生徒〉を「黒こげ」にし、その悲劇性をもって戦争の悲惨さを訴えた「燃えよ黄の花」から、60年安保の渦中で斃れた樺美智子の死が〈神話化〉されるまで、二年と離れてはいなかった。

第二部の第一章では、倉橋由美子(1935年～2005年)の「死んだ眼」(1960年)という作品を扱っている。この作品の内容を読解するとともに、掲載誌である『マドモアゼル』誌に1960年8月号に掲載された樺美智子のインタビュー記事の記述を分析することで、『マドモアゼル』誌が樺を、死を予感しながらも安保闘争に参加した〈聖女〉として扱う姿勢を持ち、倉橋に樺への共感を期待して作品を依頼しているだろうことが見えてきた。これに対して倉橋は、同誌に掲載された樺へのインタビュー記事の、読者に向けて記者が一人称で呼びかける文体を思わせる一人称文体を選択。樺の死を「くだらない、ばかばかしい、救いようのない死だと思う」と述べる内容を『マドモアゼル』に送り込んだ。どのような形であれ、樺の死を〈神話化〉することは、『マドモアゼル』誌の読者たちを他者の都合により一方的にまなざし、客体化することにつながるからである。

第二章では、倉橋の「蠍たち」(『小説中央公論』1962年)に登場する麻酔分析及びテープレコーダーについて調査し、当時それらが有していたイメージや背負っていた文化的文脈を踏まえた上で、作品冒頭に付されている但し書きに注目している。そこからは、登場人物Lの口述が、アメリカ的な文化や制度を精査することなく、良いものとして受容し、施行する日本社会に対する、〈抵抗〉の様相を呈していたことが明らかとなった。同作ではLの肉声が「精神鑑定書の原資料」として加工されていく過程を示すことによって、1960年代初頭の日本社会が、1950年代の男女ジェンダーの不均衡な構図を引き継いでおり、しかもその構図が、公的権力の行使される、まさにその行為の内に、潜在化していた様を暗示しているのである。

第三章では、〈ジュニア小説〉を最初に受容し、倉橋由美子によって〈抵抗〉する者として表象された1940年代生まれ世代が、就職や結婚によって社会に出ていく際の苦悩を描いているとして捉えられた柴田翔(1935年～)の、『されど われらが日々』(1963年)のベストセラー化に注目している。同作は同人雑誌『象』7号に発表された後、『文学界』1964年4月号に転載され、芥川賞を受賞した。さらに単行本化され、柴田の想定したものとは異なる世代に受容されることとなる。自分たちの世代の物語であると「誤読」し、受容した1940年代生まれ世代に注目することにより、1950年代を描いた同作が1960年代以降の若者像として読まれたことでベストセラー化していった現象の意味を考察している。

以上のように、小説に描かれた〈女子生徒〉・〈女子学生〉表象の変遷と変容を辿ることによって、戦後初めて新制学校で公教育を享受した世代の苦悩、そして〈抵抗〉を論じている。思春期にアジア太平洋戦争と敗戦を経験した佐伯千秋が、戦後、対等な男女関係を基盤として成立する新しい民主主義社会という理想の実現を新世代の読者に期待して執筆した〈ジュニア小説〉の中の〈女子生徒〉表象から、実際に戦後社会の中で初等・中等教育を経験した倉橋由美子や柴田翔の描いた、社会から求められる姿や在り方に〈抵抗〉する、あるいは〈抵抗〉せざるを得なくなった〈女子学生〉表象や元〈女子学生〉表象への変容が、明確に浮かび上がってきた。終戦直後に夢見られた理想像の実現は少女たちに託されたが、やがてそこに潜在する欺瞞性が顕在化する。それに伴い変容していった〈女子生徒〉・〈女子学生〉表象には、高度経済成長初期における日本社会の構図が刻印されていたのである。

論文審査の結果の要旨

〈研究概要〉

日本近・現代文学研究において、〈ジュニア小説〉が研究の対象とされることはこれまでほとんどなかった。子供向けのジャンルゆえに文学的価値を低く見積もられてしまったこと、また近年の大衆文学を再評価しようとする動きにもうまく乗れなかったことが影響していると考えられる。それは女学校を舞台に花開いた、「エス」と呼ばれる女学生同士の愛情関係を描いた〈少女小説〉が、ジェンダー・セクシュアリティ論的な見地から注目を集めるようになり、一気に研究が進展したのとは対照的であった。男女共学化した戦後の初等・中等教育を前提として成立した〈ジュニア小説〉が描いたのは男女恋愛であって、保守的な思想を体現しただけのジャンルとみられてしまったのである。

だが戦後社会においては、男女共学化とそれに伴って実施された教育が、「対等な男女関係を基盤とする民主主義社会」といった、新しい時代の理想を実現するための仕組みであったことを忘れてはならないだろう。本論文では、戦後的理想を背景として登場した 1950～1960 年代の佐伯千秋による〈ジュニア小説〉、そして〈ジュニア小説〉を読んで育った世代である倉橋由美子と柴田翔が描く 1960 年代の学生文学を、とくに〈女子生徒〉・〈女子学生〉表象に着目しながら分析を進めている。そのなかで浮かび上がってきたのが、一見すると対照的な思想に基づくように見える〈ジュニア小説〉と学生文学が、戦後的理想への応答という点では実は同じ土台の上に立っていたという事実であった。前者では戦後的理想への期待が語られ、一方後者ではそれらへのアンチテーゼが追究されていたというのである。本論文は、文学研究の立場から、高度経済成長期に生じた戦後的理想の崩壊という現象と、そのなかで新たな道を求めようとする若者たちの心性とを明らかにしたものであるといえる。

〈本論文の意義〉

本論文の今日的価値としては、(1)「文学史研究における意義」と、(2)「文化史研究における意義」の二つに大きく分けることができる。

(1)「文学史研究における意義」については、まず〈ジュニア小説〉というジャンルを研究の

組上に載せた点が挙げられる。先の〈研究概要〉でも触れたように、大衆文学が再評価される機運が近年高まってきたにもかかわらず〈ジュニア小説〉はその潮流に乗ることができず、これまで文学研究領域において言及されることはほとんどなかった。ゆえに〈ジュニア小説〉にかかわった作家たちの伝記的情報など、研究の基礎となる知見すら確とまとめられていない現状がある。本論文は、第一部の各論を通じて、〈ジュニア小説〉成立の過程や、その際に中心的な役割を担った佐伯千秋の伝記的事項の検討などをおこなっており、今後の〈ジュニア小説〉研究の土台となり得る議論が展開できている。

また第二部で、倉橋由美子や柴田翔といった作家たちが 1960 年代の学生を描いた作品群を、〈ジュニア小説〉との関係のなかで見直そうとした点も、文学史に新しい視角を持ち込むものになっている。倉橋や柴田の純文学に飛びついた若者たちが、戦後的理想を色濃く反映した〈ジュニア小説〉によって涵養されてきた世代であったことを踏まえると、彼らが倉橋らの作品に満ちる反道徳性に戦後的理想へのアンチテーゼを読み取っていた可能性があるという指摘は、既存の文学史に読者の側からみた新たな一面を書き加えるものだといえよう。

(2)「文化史研究における意義」については、文学という視座から戦後社会を生きた若者たちの心性を析出した点が挙げられる。戦後になってあらわれた「対等な男女関係を基盤とする民主主義社会」といった新しい理想が、実際の社会のなかでどのように受け入れられ、あるいは無効化させられていったのか。本論文は、〈ジュニア小説〉および 60 年代の学生文学という非常に限られた対象からみえてくる範囲で、という限界はあるにせよ、この大きな問題に対する独自の見解を示すものになっている。その成果は、文学研究のみならず、歴史学や社会学などの隣接する人文学領域の研究にとっても資するところがあると考えられる。

〈本論文の評価と課題〉

第一部「〈ジュニア小説〉、あるいは〈ジュニア小説〉の中の〈女子生徒〉」の三つの章では、〈ジュニア小説〉の成立過程および創成期の〈ジュニア小説〉を牽引した作家・佐伯千秋の随想や小説が取り上げられている。〈ジュニア小説〉研究の基礎となる情報をこれだけまとめたかたちで提示した研究は他にはなく、この点は本論文の特色として高く評価できる。

しかし、いくつかの主張については、まだまだ検討の余地があると考えられる。例えば、佐伯が随想で触れ、また自作のなかでも用いていた「現代っ子」的な口語表現について、「宇能鴻一郎や橋本治の軽妙な女性一人称文体」と比較しつつ、日本現代文学史からこぼれ落ちてきた「孤独な少女独白体」と位置付けているが、そのためには複数の本文を引用し比較検討するといった、より実証的な手続きが不可欠であろう。また、第一部では三つの章すべてで佐伯がとりあげられ、それぞれの章における問題意識に基づいた分析が試みられているのだが、そこに浮かび上がってくる佐伯像には統一性がないように見える。第一章では、随想「現代っ子の言葉」(1975 年)の分析を通じて、自分たち戦時教育世代の価値観を否定しきれない佐伯の姿を描き出していくが、第三章では「燃えよ黄の花」(1958 年)に軍国少女であった自分を悔いる「叫び」が見出されている。人間とはそもそも多面的な存在であることを考慮に入れば、齟齬もあって当然なのだが、このような揺れがなぜ生じているのか、またそれがどのような意味を持つのかについて、もう一步踏み込んだ分析があれば、佐伯の思考をより精緻に捉えられたはずである。

第二部「〈抵抗〉する〈一九六〇年代文学〉の中の〈女子学生〉」の三つの章では、倉橋由美子と柴田翔がそれぞれ手がけた、1960年代の学生を描いた文学に焦点が当てられている。各論は独立性が高いが、本論文末尾の「おわりに」におけるまとめによれば、第二部で扱われる作品群とその受容の過程には、〈ジュニア小説〉の根底をなす戦後の理想に対する新世代からの〈抵抗〉が刻み込まれているのだという。1950年代から1960年代の文学をこのような視点から通観する論はこれまでになく、文学史研究としてみても挑戦的な試みであることは間違いない。

だが、そうした挑戦的な姿勢が災いしてか、個々の分析は段階を踏んで進められているにもかかわらず、そこから唐突に「年長世代作家と夢枕獏ら若手世代作家の関係性」が重ね合わされて「一九七八年当時における夢枕獏の鬱屈した思い」が読み取られたり(第一章)、同じく細やかなテキスト分析からいきなり「Lの母親が当時の日本社会自体を象徴させた存在」と読むことができる可能性が示唆されたり(第二章)と、勇み足を思わせるような箇所が散見される。

また、時代背景との関わりについての掘り下げが十分になされておらず、狭い視野からのみの解釈にとどまっている点もみられた。第三章などは、1950年代から1960年代にかけての学生たちが、〈純潔教育〉とはかけ離れた学生運動の混沌に象徴されるような現実のなかで生きていたことを踏まえると、作中の男女関係について、さらに異なる角度からの検討ができるのではないか、と思われる。

ここまで挙げた指摘に加え、全体に関わる問題として、本論文のなかでしばしば用いられている「客体化」の意味についても問われた。本論文の議論では、〈女子生徒〉や〈女子学生〉は戦後社会の権力構造——文学もその一端を担う——のなかで客体化されてしまう存在として位置付けられているが、彼女らがそのなかでどのように〈主体化〉していこうとしていたのかについては、ほとんど目が向けられていない。単に〈抵抗〉という一言では捉えきれない様々な動きがあったはずである。

本論文は、〈ジュニア小説〉をはじめとするこれまで見過ごされてきた題材を丁寧に扱うことで、日本近代文学史に新しい議論の地平を開くものとなっており、この点は大いに評価に値するが、上記のような指摘を踏まえることで、本論文著者の研究が今後さらなる発展と深化を遂げていくことを期待したい。

〈博士論文としての適格性〉

①「研究課題が、現代社会の問題解決にとって適切か、あるいは新たな文化創造のための契機となり得るか」については、〈本論文の意義〉で示したように、既存の様々な研究がいまだ手をつけてなかった題材・課題をとりあげており、またそれぞれの題材・課題ごとに適当な分析方法を使い分ける工夫がみられることから、⑤「課題に対する研究方法は十分に妥当か」ともども、条件を十分に満たしている。

②「結論が、現代社会の問題解決のための有効な提案となっているか、あるいは新たな文化創造のための極めて有益な提言となっているか」についていえば、本論文の成果は今後の〈ジュニア小説〉研究の基盤となり得るものになっている。したがって、⑦「専門分野の研究の進展に大きく寄与できるか」についても、その可能性を大いに認めることができるだろう。

また③「論理性・実証性・資料処理の適切性・創造性」については、〈本論文の評価と課題〉

で指摘されたような改善すべき点が残されているものの、学術論文に求められる水準には到達していると判断された。④「先行研究の踏襲と超克が十分に実現できているか」についていえば、先行論に対する丁寧な検討とそれを踏まえた適切な批判は、本論文の長所のひとつに挙げられるものである。

なお、⑥「在籍中の学修・研究成果が十分に反映されているか」については、本論文の目次で示されているように、本論文は申請者が在籍中に発表した複数の論文に加筆・修正したものを土台にしており、まさに在籍中の学修・研究成果が反映されたものになっている。

以上の理由により、学位審査委員会は全員一致で本論文を合格とし、博士（文学）の学位を授与するに相応しいと認定するものである。

以上